

## 有部の不失法因と正量部の不失

——『中論』第 17 章所述の「不失」に対する観誓の解釈——

那 須 良 彦 (旧姓 櫻井)

0. はじめに 龍樹 (Nāgārjuna, 150-250 頃) の『中論』第 17 章の主題は、業とその果報を結びつけるものは何か、その二つの間に必然的関係があり得るのか、である<sup>1)</sup>。この中で、第 12 偈～第 20 偈において、不失 (avipraṇāsa) なる心不相応行法を主張する部派を、仏護 (Buddhapālita, 470-540 頃) の註、清弁 (Bhāviveka, 500-570 頃) の註、月称 (Candrakīrti, 600-650 頃) の註等は「他の人々」<sup>2)</sup>としている。漢訳の清弁の註『般若灯論釈』は、「正量部」としている<sup>3)</sup>。これに対し、清弁の註に対する観誓 (Avalokitavrata, 7c 前半) の註 *Prajñāpradīpaṭīkā* (PPT) は、

声聞毘婆沙師達 (nyan thos bye brag tu smra ba dag = \*śrāvaka-vaibhāṣikāh) は、前に他部派の者達が「種子と芽の連続の關係の如く、業と果報との關係は存在する故に、輪廻は存在する」と言った説は正しくない」と批判して、自己の学説に基づき〔次の様に述べる〕。  
… (PPT., D. 32a3-a4, P.37b7-38a1)

として、不失の学説の保持者を毘婆沙師 (Vaibhāṣika) とする。現代の研究者は、漢訳の『般若灯論釈』、徳慧 (Guṇamati) の『随相論』<sup>4)</sup>、『成業論』に対する善慧戒 (\*Sumatiśīla) 註<sup>5)</sup>、真谛訳『顯識論』<sup>6)</sup>等の記述に基づき、『中論』第 17 章所述の不失の学説の保持者を正量部説としている点で一致する<sup>7)</sup>。

しかし、観誓が、不失の学説の保持者を正量部とせず、毘婆沙師とした意図に関する考察は未だ為されていない。本考察は、この点に関する筆者の推測を述べることを目的とする。

1. 毘婆沙師という名称について ところで、毘婆沙師 (Vaibhāṣika) とは、言うまでもなく vibhāṣā に、taddhita 接尾辞 ika を附した第二次派生名詞である<sup>8)</sup>。そして毘婆沙師とは、元來論蔵等への註釈家達に冠せられた名称であるが、『婆沙論』成立以降は、*Vibhāṣā*、つまり『婆沙論』を研究し、それに従う者達に冠せられた名称であり、一般に有部において『婆沙論』に基づく教義学を研鑽している者達を指すと考えられる<sup>9)</sup>。

しかし、梶山雄一博士が指摘している様に、観誓は「Vaibhāṣika の語をかなり

広義に用いるのが常である」<sup>10)</sup>。加えて、後期インド仏教において、毘婆沙師の所説とされる学説が必ずしも有部の学説を意味せず、他部派の学説もありえることは従来の研究により明らかにされている。上山大峻博士は、後期インド仏教の諸論書において、正量部のものと考えられる学説が毘婆沙師の所説に帰されている記述<sup>11)</sup>等を指摘し、「後世の仏教徒は毘婆沙師の名の下に、仏陀の初期の相承者たちを理解している。そしてその名は凡ての十八部派に共通なものと考えている」<sup>12)</sup>とする Wassiljew の古典的研究に賛意を表している<sup>13)</sup>。この様に、正量部の学説を毘婆沙師の所説とする事例が観誓の註の他にもみられる。そもそも他ならぬ観誓自身も、

毘婆沙師の定説によれば、…中略…不失は、この世、或いは次の世、或いは後々の世において、作者であるブドガラに、異熟〔果〕や等流果を与える。そして、作者は果報を受け取るのである。… (PPT., D. 34a1-a4, P. 40a4-a8)

という様に、正量部の宗義を踏まえた如き記述を為し、それを毘婆沙師の所説とする。従って、観誓は正量部の宗義を知っていたと推測されうる。このことから、「彼のいう毘婆沙師とは正量部を含むものであろう」<sup>14)</sup>。

そこで筆者は、後期のインド仏教において、毘婆沙師が有部ばかりでなく、有部以外の部派をも指しているという従来の研究により指摘されてきた事実を踏まえ、正量部と有部との教義上の類似性という観点から、観誓の意図を模索する。

**2. 正量部の不失の学説** 次に、『中論』第12偈～第20偈の記述に従って、正量部に帰される不失の学説を略説しよう。

まず、作者が業を為せば、業は刹那滅のものであるという理由で、その業は滅してしまふ。しかし、その業に基づいて、その業の果報を保持するものである、心不相応行法に位置づけられる不失なる別法が生ずる<sup>15)</sup>。作者には、この不失が残存するという理由で、作者の業の果報は滅することがない。不失は人が借金をした時に残る債券に喩えられる<sup>16)</sup>。そして、その不失がやがて果報を与えるに至る<sup>17)</sup>。この不失は三性門分別すれば、本性上、善でも不善でもなく無記のものであり、界繫門及び有漏無漏分別すれば、三界及び無漏界に通ずる<sup>18)</sup>。断分別すれば、唯修所断である<sup>19)</sup>。

以上の様に、不失は、『中論』において、業因業果の文脈で、業の果報を有情の心身に繋ぎ留めておく機能として紹介されている。

**3. 有部における不失法因としての得の機能** 従来の研究によれば、有部の教義学における業とその果報に関しては次の様な結論が得られている。

業が果報を感ずる場合に、業と果報との間に、業と果報とを連結させるものを必要とせず、業を造るのと同時に、如何なる果報を招くべきか、またその業がその果報を招くべき原因となることは既に決定している(取果)<sup>20)</sup>。では、過去に落謝してしまった業力が、何故、現世や後世、或いはそれ以降に与果しうるのかといえば、有部はそれを三世実有説をもって説明する<sup>21)</sup>。即ち、善悪の業力は過去にあっても実有であるから、当来の果報を与果することが出来るとするのである<sup>22)</sup>。だが、この業力が何故に有情に随逐して離れないのかといえば、得(=成就)の力によってこの業力が有情の身心に繋ぎ留められているからなのである<sup>23)</sup>。

衆賢(Saṅghabhadra, 420-460頃)の『順正理論』は、得の实在論証の文脈で、此定不然。非非理故。由所許得是已得法不失因故。又是知此繫屬於彼智幟幟故。(『順正理論』T. 29, p. 397b4-6)

という様に、不失法因(dharmāvipraṇāśahetu)<sup>24)</sup>という得の機能に言及する。或る有情が、刹那Aにおいて、有為にして有情数の法甲を獲得したとする。そしてその有情が刹那Bに法乙を起こしたとする。しかし刹那Bに法乙を起こしても、その有情から法甲が無くなるわけではない。非得によって法甲をその有情から隔離しない限り、その法甲は、刹那A・B以降もその有情に存続する<sup>25)</sup>。この様に法を有情の身心に繋ぎ留めて失わしめない得の機能を、衆賢は不失法因と名づける。この不失法因としての得の機能は、業の文脈でも用いられる。

『発智論』は業蘊第四の中、自業納息第五において先ず、自業の定義及びその定義の理由を述べ、次に自業の三世門分別を示し、第三に、自業と成就(=得)する業との四句分別を明らかにする。そして第四番目に、自業と異熟を受けるべき業との四句分別を説く<sup>26)</sup>。さらに第五番目に、成就(=得)する業と、必ず異熟を受けるべき業との四句分別<sup>27)</sup>を詳説するが、その四句分別の第三句目で、

有業成就此業定当受異熟。謂業過去不善善有漏、異熟未熟、此業不失、若業未来不善善有漏、已得亦定当生、若業現在不善善有漏。(『発智論』T. 26, p. 980c11-c14)

という様に、業力を有情の身心に繋ぎ留めて失わしめないという得(=成就)の機能に言及している。この文の「不失」を『婆沙論』は次の様に解釈する。

此中「謂業過去不善善有漏異熟未熟此業不失」者、謂諸無間業已現在前、已牽異熟、果未現前。若律儀業、若非律儀業、若非律儀非不律儀諸余身語妙行惡行、若欲界繫善不善思、若惡作憂根俱生善思、若諸靜慮無色順退分乃至順決択分等業已現在前、已牽異熟、一此有三種、謂順現法受等如前説— 果未現前、此業不失、由無前所説諸失緣故。(『婆沙論』T. 27, p. 652a12-a20)

この様に、『発智論』や『婆沙論』は、業因業果の文脈で、業力を有情の身心に繋ぎ留めて失わしめないという機能を持つ得（=成就）に言及している。

4. おわりに一観誓が『中論』第17章第12偈以降の主張者を毘婆沙師に帰した意図一 有部は、業因業果の文脈で、心不相応行法たる得（=成就）が、業力を有情の身心に繋ぎ留めて失わしめないという機能を有すると主張する。一方、正量部は、業因業果の文脈で、心不相応行法たる不失が、業の果報を有情の身心に繋ぎ留めて失わしめない機能を有すると主張する。

無論、正量部の不失と、有部の得とは違いが存する。正量部の不失は、本性上、唯無記であるが、有部の得は、本法の異なりに基づくので三性に通ずる。さらに、正量部の不失は唯修所断であるが、有部の得には見所断のものも、修所断のものもある、等々。

だが、正量部の不失も、有部の得も、業因業果の文脈で語られるうるものであり、業力を有情の心身に繋ぎ留め、失わしめない機能として言及され、いずれも心不相応行法に位置づけられる点で共通する。

さらに後期インド仏教では、毘婆沙師の名称は有部ばかりでなく、有部以外の部派をも指しうる名称であることが、従来の研究により明らかにされている。

以上の点を考え合わせると、観誓は、不失の学説の保持者に毘婆沙師の名を冠することによって、正量部の不失の学説ばかりでなく、有部の得をも批判の射程に入れようとしたのではないかと推測されうる。即ち、業因業果の文脈で語られ、それらを失わしめない心不相応行法があるとする学説全てを批判の対象とする意図があったのではないかと推測されうる。

- 1) 梶山雄一 [1978] 「中観哲学と因果論」（仏教思想3『因果』）p. 154. 2) *Buddhapālita-mūlamadhyamakavṛtti*, D. 233b2, P. 264a6-a7, *Prajñāpradīpamūlamadhyamakavṛtti*, D. 173b4, P. 215b5, *Prasannapadā nāma Mūlamadhyamakavṛtti* (*Pras.*), edited by L. de la V. Poussin, p. 315.12. 3) 『般若灯論釈』T. 30, p. 100c8-c9. 4) 『隨相論』T. 32, p. 161c28-a7. 5) *Karmasiddhiṭīkā*, D. 81b4-b5, P. 91b1-b2. 6) 『顯識論』T. 31, p. 880c15-c18. 7) É.Lamotte [1935-1936] *Le Traité de l'Acte de Vasubandhu Karmasiddhiprakaraṇa*, pp. 160-163, *Traité de la Démonstration d'Acte*, pp. 230-231, *Madhyamakavṛtti* XVII Chapitre, *Mélanges Chinois et Bouddhiques*, 4, p. 274, 山口益 [1951] 『世親の成業論』pp. 153-155, 舟橋一哉 [1954] 『業の研究』p. 118, 安井広済 [1974] 「中観学説における業の理解」『仏教学セミナー』20, pp. 155-159, 梶山雄一 [1978] p. 158, 梶山雄一 [1979] 「パーヴァヴィヴェーカの業思想」『業思想研究』pp. 314-315, 前田至成 [1981] 「三彌底部 (Sammitiya) の業思想」相愛女子大学・短期大学『研究論集』音楽部編 28, p. 128, 三谷真澄 [1996]

〔中論『仏護註』第17章和訳』『仏教学研究』52, p. 80, n (28). 8) 毘婆沙師の語義については岩崎良行 [2002] 『『俱舍論釈』における「毘婆沙師」の語義解釈(前編)』(『櫻部建博士喜寿記念論集』)がある。9) *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā (AKV)*, edited by U. Wogihara, p. 12.7-8, *AKV*, p. 694.3-7. 向井亮 [1978] 「ヨーガーチャーラ(瑜伽行)派の学派名の由来」『三蔵集』4, p. 269を参照。10) 梶山雄一 [1978] p. 174.n5. 11) *Tattvaratnāvalī*, revised by H. Ui (『大乘仏典の研究』) pp. 1.20-2.4, *Prakaraṇa-Vimśatikā-tikā*, D.178b3, P. 210b2-b3. 12) W. Wassiljew [1860] *Der Buddhismus*, p. 293. 13) 上山大峻 [1958] 「毘婆沙師 (Vaibhāsika) の系譜について」『印度学仏教学研究』7-1, pp. 184-185. 14) 梶山雄一 [1979] p. 315. 15) *Pras.*, p. 317.6-8, *PPT.*, D. 34a2-a3, P. 40a5-a6. 16) *Mūlamadhyamakārikā (MK)* in *Pras.*, p. 317.4. 17) *MK* in *Pras.*, p. 320.4. 18) *MK* in *Pras.*, p. 317.5. 19) *MK* in *Pras.*, p. 319.1. 20) 荻原雲来 [1928] 「加藤氏の業感縁起論の誤解に就いてを讀みて」『大正大学学報』4, p. 15, 舟橋一哉 [1954] p. 104, 櫻部建 [1978] 「アビダルマ仏教の因果論(仏教思想3『因果』) pp. 141-142. 21) 加藤精神 [1929] 「有部の業感縁起論に就いて」『大正大学学報』5, pp. 5-6. 22) 加藤精神 [1929] p. 6. 23) 加藤精神 [1929] p. 6. 正量部の不失と有部の得(=成就)とを比較する試みは、『成唯識論述記』(T. 43, p. 289b6-b7)や『唯識論同学鈔』(T. 66, p. 142b5-b8)等に存する。『唯識論同学鈔』は、正量部の不失が果報を獲得させるものであるという理由で、有部の得と機能を同じくする旨を示す。本発表は、正量部の不失と、有部の得との機能上の類似性を指摘することを通して、観誓が不失の学説の保持者を毘婆沙師とした意図を模索するものであるが、かかる着想は『成唯識論述記』や『唯識論同学鈔』の記述から得た。24) 得の持つ不失法因としての機能については、加藤宏道 [1985] 「得・非得の研究」『仏教学研究』41, pp. 44-46及び拙稿「不失法因・智標幟としての得」『仏教学研究』58・59合併号(近刊)を参照。25) *Abhidharmakośaṭīkā lakṣaṇānusārīṇī nāma*, D. 154b6-b7, P. 180b3-b5に基づく。26) 『発智論』T. 26, p. 980b9-c5 (『八韃度論』T. 26, p. 852c1-c27). 27) 『発智論』T. 26, p. 980c5-c17 (『八韃度論』T. 26, pp. 852c27-853a14).

〈キーワード〉 Avaloktavrata, *Prajñāpradīpatikā*, 正量部, 不失, 得

(教学伝道研究センター研究員)